

JELA NEWS

ジェラニュース 第65号

2024年12月15日 発行

発行責任者 渡辺 薫

公益財団法人 JELA 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 TEL.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援事業 / 世界の子ども支援事業 / 奉仕者育成事業 / 緊急災害支援事業

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。(マタイによる福音書25章35～36、40節)



祝・創立 115 周年&公益認定！ 支援者・パートナー 47 名が集う

難民支援

JELA難民支援事業40周年！(P3)

奉仕者育成

インド・ワークキャンプ2024参加者レポート (P4-5) / アメリカ・ワークキャンプ2024参加者レポート (P6-7) / アメリカ・ワークキャンプ2025参加者募集！(P8)

その他の記事

創立115周年を祝う「JELA支援者のつどい」(P2) / 初出展！グローバルフェスタJAPAN2024 (P2) / 支援者一覧(P8) / 編集後記(P8)

創立115周年を祝う「JELA支援者のつどい」

今年、創立115周年を迎えたJELAは、4月1日に公益認定を受けることも叶い、次の100年に向けて歩み出しました。この機会に、日頃からJELAを支えてくださっている支援者の方々や、JELAの公益事業に欠かせないパートナー団体・企業の方々をお招きして感謝をお伝えするために、10月14日に「JELA支援者のつどい」を開催しました。

会場となったJELAミッションセンターホールは、竣工から20年ほど経ちますが、今回のようにホテルの宴会場さながらに丸テーブルが配置されたのは初めての試みであったかもしれません。かつてJELAミッションセンター建設計画が進んでいた頃、理事会では1階部分をレストランなどの収益物件として事業活動費を捻出するよう計画を立てていたそうです。しかし、設計の承認段階に至り「団体の本部にこそ、団体のミッションを体现できる空間を持つべきだ」という思いが与えられ、急遽図面を引き直し、現在のホールが完成しました。



JELAのミッションは、「キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人々に仕える」です。この度、全

国から集まってくださった47名の方々がランチと歓談の時を楽しみつ、JELAが展開する3事業（世界の子ども支援事業、難民支援事業、奉仕者育成事業）について担当職員が説明するプレゼンテーションに聞き入ってくださる姿も、その時の決断によってもたらされた実りの一つでした。



JELAの事業プレゼンテーションは、担当職員ならではの実務的な視点から語られる事業の魅力、やりがい、事業の誕生秘話など、これまでブログや紙面で紹介したことのない内容が多く、会場の参加者からも「JELAの事業がより身近に感じられた」「知っていたつもりだったが、JELAの事業がここまで多岐に渡っているとは思わなかった」など、事業運営側にとっても大きな励みとなるお言葉をいただきました。

パートナー団体・企業のゲストスピーチでは、パナソニックホールディングス株式会社様から国際的に活躍する企業のCSR事業の重要性について、UNHCR駐日事務所様から来日難民支援の課題と展望について、それぞれJELAとのパートナーシップをテーマとしてお話しいた

きました。会場には、JELAが支援している難民奨学生の方やJELAの国際ボランティア経験者も駆けつけてくださり、JELAが支援する人々を支援者の皆様にご紹介することもできました。JELAが支援する方々によるスピーチは、チャンスと希望をつかみ前進する熱意と真摯さに満ちたもので、「思わずもらい泣きした」方もいらっしゃったようです。

会の後半では、サクセス奏者のステイブ・サクセスさんとピアニストの廣瀬みちるさんによるチャリティコンサートが開かれ、Jazzアレンジの讃美歌やショパンの名曲が豊かな音色で奏でられました。帰り際に「JELAがJazzホールになったね」と微笑む方もいらっしゃいました。華やかなサクセスの音色で締めくくられた「支援者のつどい」は、お集まりくださった方々とともに、JELA創立115周年への最高のプレゼントとなりました。



お集まりくださいました皆様、会の成功をお祈りくださいました皆様、誠にありがとうございました。これからのJELAの公益財団としての活動もぜひご期待ください！

JELA 難民支援事業 40周年！

来日難民のためのシェルターと奨学金を大きな柱として

今から40年前の1984年、JELAは難民支援事業を開始しました。はじめは思いがけない出来事から。この事業が後に年間予算2千万円超の事業となることを、当時誰が想像したでしょうか。本記事では、シェルター提供と奨学金を中心とする、JELAの主要事業の一つへと大きく成長した難民支援事業の歴史を振り返ります。

■ 必然か偶然か？ 事業のはじまり

1984年6月、日本福音ルーテル教会（JELC）が本部を置くルーテル市ヶ谷センターの一室に、イランから来日したAさん一家が入居しました。外務省から「難民が宿泊できる部屋はないか、難民を助けてほしい」という要請を受けたJELCが、それに応じたのです。当初、牧師や宣教師、建物を共用するルーテル市ヶ谷教会の信徒が個人的に一家の支援にあたりました。

しかし、外務省予算による本格的な支援を行うにあたり、宗教法人が国の業務委託を受けることはできないという法的制約がありました。そこで、当時社団法人格を有し、同じくルーテル市ヶ谷センター内に事務局を置いていたJELAに委託先として白羽の矢が立ったのです。

■ 最初の難民家族らと出会い

Aさん一家は、本人、妻、高校生の長女、小学生の長男の4人家族。当時はイラン革命から数年を経過したところで、イスラム原理主義への回帰を嫌う人々が海外に流出した時期でした。当時、イランからビザなしで渡航できる先は日本とペルーしかなかったため、Aさん一家は日本を選んで来日しました。

Aさんは所持金を米ドルに両替した際に偽札をつかまされ、無一文で途方に暮れていました。しかしルーテル市ヶ谷センター内のホステルで清掃の仕事を得て、またJELAとルーテル市ヶ谷教会の信徒による生活物資等の支援を受けて、Aさん一家の生活は安定しました。このように、ルーテル教会との協力の中でAさん一家を支えるというのが、JELAにとって初めての難民支援となりました。

■ 増加する難民、足りない住居

支援対象となる難民が増える中、JELAはこの事業に本腰を入れます。継続的協議の末、生活基盤の脆弱な難民申請者のための住居が国内に存在しないことを特に重大な課題として認識するに至りました。

そこで一時住居（シェルター）の提供を中心とした支援活動を展開するという大きな舵取りを行い、1989年、都内の中古アパート1棟を購入。また円滑な事業運営のため、JELA、UNHCR駐日事務所、法務省、外務省、日本国際社会事業団の担当者から成る「ルーテル難民協力懇談会」を設置しました。

購入したアパートは、既存の住人の退去を待ちつつ、改装・家具の購入などの受入準備を進め、1991年に難民シェルター「JELAハウス」としてオープンしました。（2018年に建替工事を行い、現在はシェアハウス型の女性専用シェルターとして運営。）



▲初代JELAハウス

現在は、2011年に都内の別の場所に新たに購入したアパートとあわせ、2か所で「JELAハウス」を運営しています。これらのシェルターは、公の支援や就労が決まるまでの間、難民の方々が心身を整え、次のステップに備える場となっています。

■ 返済不要の2つの奨学金

JELAは2001年に奨学金事業を開始し、これまでに百数十名の方々に返済不要の奨学金で支援してきました。難民に特化した奨学金ではありませんでしたが、難民も積極的に支援してきました。奨学金を希望する難民が増えてきたことを受け、2022年以降は、難民支援事業の中で在日難民のための奨学金を提供することとなりました。

現在JELAが実施する難民のための奨学金制度は、当初の奨学金事業から独立する形で生まれた「JELAフィロクセニア奨学金」と、JELA、UNHCR駐日事務所、ウェスレー財団が共同実施する「難民専門学校教育プログラム（RVEP）」の2つです。フィロクセニア奨学金は、難民申請者も応募でき、日本語学校から大学院まで、難民の志望する学びを幅広く支援しています。RVEPは認定難民の専門学校進学に特化した奨学金で、奨学生は調理師、薬剤分析の専門家、IT技術者、医療従事者などの進路を目指して学びに励んでいます。

両奨学金ともに毎年5名前後の難民が進学の夢を叶えていて、これまで既に10名以上の修了生を輩出しています。

■ パートナーと共に

難民支援事業はパートナー団体や支援して下さる皆さんによって支えられています。JELAへの寄付は税制上の優遇措置を受けることができます。JELAサポーターとして、皆さんにもJELAの難民支援をはじめ公益事業をお支えいただけますと幸いです。

初出展！ 「グローバルフェスタJAPAN2024」

JELAは9月28日・29日の2日間、新宿住友ビル三角広場（東京都新宿区）で開催された「グローバルフェスタJAPAN2024」（同実行委員会主催）に初めて出展しました。

「グローバルフェスタJAPAN」は、国際協力活動やSDGsに取り組む官民

の団体が一堂に会する国内最大級の国際協力イベントです。



初出展でしたが、多数の方がJELAの事業に興味を持ってくださり、2日間で推定約800名の方がJELAと接点を持ってくださいました。

これまでJELAのことを知らなかった方々に、JELAやその公益事業についてPRできたことは大きな成果でした。JELAのブースへお越しくださいました皆さま、誠にありがとうございました！

インド🇮🇳ワークキャンプ 5年ぶりに開催！

2024年2月12日～22日、インド・マハラシュトラ州のジャムケット村にてインド・ワークキャンプを開催しました。参加者は12名の大学生。ジャムケット村の地域医療福祉団体「The Comprehensive Rural Health Project (CRHP)」にて、52本の義足作りに貢献し、インドの農村社会について学ぶ機会を得ました。その体験を綴った参加者たちのレポート(抜粋)をご紹介します。 ※学年はキャンプ当時のもの

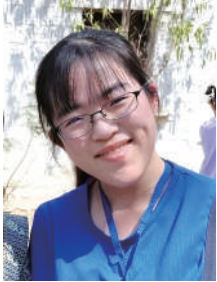
◆相手への思いを込めた義足作り 柘植 あまね(大学1年)

義足作りでは、最初に患者さんの年齢、職業、家族構成などの基本情報や、どのようにして足を失ったのか、心と体の状態などの聞き取りがなされました。「肉屋を拡大したい」「義足さえあればまた運転ができ、独立できる」など義足をもらった後どうなりたいかを聞き、一人でも多くの方の願いが叶いますようにと強く願いながらその後の工程に取り組みました。工具を上手く使って一本の義足を仕上げる方法は手間がかかりましたが、手間がかかるからこそ、聞いた話と重ねながらその人への思い、愛がこもっていると感じ、素敵だと思いました。



◆将来に繋がる学び 山嶺 小雪(大学2年)

キャンプに参加した理由として一番大きかったのは、大学で国際政治を専攻していることと、人間開発等における国際支援に強い興味を持っていたことでした。今回学んだことは大きく分けて5つあり「人々の温かさ」「言語の壁の意外な薄さ」「貧困や医療の問題」「ニーズの把握の重要性」そして「自省の必要性」でした。どの体験も筆舌に尽くし難い程に濃厚で、良い点と改善すべき点と思われる点の両方を観察できました。また、今まで関係の無かった国に深く触れることが出来たと共に、将来のビジョンがより大きく開けたと思いました。



◆温かい交流と義足作りの感動 城戸 はるか(大学4年)

村の子供達のお迎えや、ソーシャルワーカーが村人の健康チェックをしている時、見ず知らずの私達に村人はにこにこ笑いかけ、子供達は嬉しそうに手を繋いでくれました。日本ではこんな経験できないだろうなと思いました。また、義足作りのワークでは金属板を切り、叩いて変形させ、言葉は通じませんが丁寧に職人さん達が義足の作り方を教えてくれて、どれも初めての経験で全てが新鮮でした。全部で52本の義足を作り、受け取った患者さんは泣いて喜んでくれました。こんなに感謝されることは少なく、感動的なシーンに立ち会う事ができました。



◆患者さんの生活に貢献できた喜び 阿部 天南(大学1年)

義足作りでは、工程が全て手作業で、患者さんに合わせてオーダーメイドしていた事にとても驚きました。幾つもの工程を義足職人の方が指導してくださり、何本も作っていく内に「Good!」と言ってくれる回数が増え、大変だった作業が徐々に楽しくなっていきました。贈呈式では、患者さんに義足を渡すと、何度も頭を下げてお礼をしてくれ、受け取った義足をつけて歩く姿はとても感動的でした。患者さんの生活に必要な義足を、日々作っている職人さんは偉大だと感じ、生活の助けとなるものを作るのに携わり貢献できた事に嬉しく思いました。



◆刺激ある日々 菅井 なるみ(大学4年)

義足作りではアルミ板から型を取り、成形する作業を行いました。最初は苦戦しましたが、現地の方の指導によって徐々に上手くできるようになりました。義足の贈呈式では、患者さんの感謝が伝わり感激しましたが、同時に申し訳なさも感じました。義足を作り上げたというよりは、そのお手伝いをさせてもらったと感じたからです。しかし、インドに来て、CRHPやスラム街などに足を運び、そこで見て知ったということが重要だと考えています。義足作りなどで感じた無力さは、それらを受け止めて次にどう繋げるか、前向きな気持ちにさせてくれた刺激でもありました。



◆人と社会をつなぐソーシャルワーク 田中 碧(大学3年)

私は大学で福祉を学んでいて、キャンプを通してインドと日本の福祉の違いなどが知りたいと思い参加しました。現地のソーシャルワーカーと一緒に近隣の村を訪問し、村のヘルスワーカーから話を聞いたり、村に暮らしている人々の生活を観察したり、福祉専攻の学生やソーシャルワーカーと交流できた事はとても良い経験になりました。私は、人と社会、地域を繋ぐのがソーシャルワーカーの主な仕事だと考えていますが、それはどの国でも共通している福祉の大切な考えだと思いました。



◆考え方の視野が広がった 五木田 映夏(大学4年)

プレスクールでの子供たちの笑顔や純粋な好奇心は、言葉を越えて心を通わせる力を持ち、インドの生活や文化への興味により深まりました。厳しい生活や困難に直面しながらも、彼らの笑顔に触れることができ、物質的な豊かさよりも、精神的な豊かさの大切さを学びました。人生初のディボーションでは、聖書の言葉や表現を自分はどうか考えるか、自己理解に繋がっていたと思いました。また、他の人の考えや同じ聖書箇所でも異なる視点を分かち合えて面白かったです。考え方の視野が広がり、少し頑固だった頭が柔軟になった気がしました。



◆聖書と共に経験を振り返る 野左根 希歩(大学2年)

ディボーションでは、与えられた聖書の言葉を読んだ感想と、その日一日の振り返りも併せて行い、意見を交わします。はじめはよくわかりませんでしたが、次第に聖書の言葉を自分が与えられたものとして読んでいくことは、自分自身と向き合うことができるのだとわかりました。そして、キャンプでの出来事と結びつけて考えることで、単なる思い出にするのではなく、貴重な経験として忘れずにとどめておくことができました。一日の出来事を日記のように振り返るのではなく、聖書と共に振り返ることに意味があるのだと感じました。



◆微力ではあるが無力ではない 若子 悠人(大学4年)

人見知り、怠惰、自己嫌悪、頑張れない。そんな自分を変えたくてこのワークキャンプに参加しました。ボランティアとして何かを「与える」ことができると思い上がっていた自分が、与えてもらってばかりいる事を情けなく思い、時が経つとその気持ちを忘れて楽しんでいる自分に気が付き、恥ずかしくなりました。帰国してからも、自分に何ができるのか、したいのか、与えられるものはあるのか。今でも答えは出ていませんが、「微力ではあるが無力ではない」の思いで、この経験で得た感情と考えを新鮮なまま忘れないでいたいです。



◆命について考えさせられた旅 元吉 紗海(大学4年)

義足作り、プレスクール訪問とスラム街から通う子供たちのお迎えや病院見学、衛生環境視察や砂糖工場見学など、多くのことを体験し、楽しさと喜びと刺激のあまり、毎日気がつくときを迎えていました。性別によって出産をするか否か迫られる女性たち。スラム街で出会った未熟児を抱いた際、物理的軽さから感じた命の重ささと尊さ。病院や幼稚園、ケアワーカーがその地域に在ることによって得られる住人の安心感と笑顔。インドの日々がとてつもなく楽しかった思い出の宝物であると共に、「生きる」ことの自由と平等について考えさせられた旅でした。



◆子供たちのためにできることを考えたい 古屋 若菜(大学3年)

特に、CRHP施設内のプレスクールに通う子供たちが住むスラム街が本などで見る景色とは全く違ったのは印象的でした。通うことのできない子供たちの方が多く、裸足、砂まみれ、パンツも履いていない状態の子もいました。その現状を前に、自分はこんなに楽しんでいいの、彼らのために何かできないか考えましたが、解決策を見つけれられるわけもなく、心に大きな穴が開いたような気がしていました。仲間との分かち合いやディボーションを通して少し消化することができましたが、人生の問いとして、インドの子供達・社会に何ができるのかを考えていきたいです。



◆「行った」だけでは終わらせない 兼満 愛(大学3年)

物乞いで生計を立てる子供達、糞尿が垂れ流しのスラム街、未だ色濃く残るカースト制度、男女出生数の大きな差。自分がこの状況を変えたい思いが湧くと同時に、自身の無力さや小ささもひしひしと感じ、何ができるか分からず悔しくて涙を流しました。しかし、ディボーションを通じて、仲間と意見を交わす中で、今できる事は何か分かってきました。それは、この体験を「行った」だけで終わらせず、何を見て何を感じたかを周囲に伝え、より多くの人に当事者意識を持ってもらう事、そしてまずは目の前の大事な人を笑顔にして幸せな気持ちにさせる事だと考えました。



参加者レポートの全文は
JELAニュースブログにて
お読みいただけます！





lollipop moment

池野 雅弥 (高校2年)



発言や行動によって、気づかぬうちに誰かの人生がよくなる瞬間を「lollipop moment」と言います。普段の僕は話を聞く側になることが多く、誰からも見られず、知られず、聞かれてもない「少し不在」な人間だと思ふ時がありました。しかしキャンプで出会った人々が、自分の弱さに負けそうな僕との出会いを喜び、受け入れてくれたことがとても嬉しく、号泣してしまいました。その時、神様の存在を感じられた気がして、ずっと前から僕の心の中を見て、ワークキャンプと素晴らしい出会いを与えて下さったのだと思いました。まさに僕の人生最大の「lollipop moment」でした。

いつも神様が

石崎 愛結 (中学3年)



私たちの人生では願いが叶わないことが何度もあると思います。しかし、神様は人生の全ての場面で手を差し伸べておられると考えたとき、不安は希望へと変わりました。神様は小さな私たち一人一人をいつも見てくださっていて、試練の中にある時こそ神様を忘れてはならないことを学びました。主題聖句(ローマの信徒への手紙12章2節)の中に「何が神の御心であるか」と書かれています。このキャンプで「神様がいます」と感じた瞬間を思い返し、神様のなさることにもっと目を向けていこうと思いました。

自分を大切に思ってくれる人がある

鈴鹿 莉愛菜 (高校1年)



英語がわからずコミュニケーションが取れなくて不安になったり、もし英語が得意だったら会話が弾んでもっと仲良くなれたのかなと思ひ、悔しいと感じたりすることが多くありました。しかし、私が不安だったときこのキャンプで一番仲良くしてくれた友達が、どうしたの?大丈夫?と英語で声をかけてくれて優しくハグをしてくれました。この友達が私のことをBest Friendと呼んでくれたことは一生忘れません。自分は一人ではなく、必ず自分を大切に思ってくれる人があるということを、みんなにもわかって欲しいとキャンプを通して改めて思いました。

神様に「変えられた」

木原 萌 (高校3年)



キャンプに参加して、相手を信じて身を任せることがどれ程自分の身を助けるのかを体感しました。最初は話しかけるのもワークをするのも自分一人で行った気でいましたが、思い返してみれば、話せたのは現地の子が私の話を注意深く聞いてくれたため、ワークでは私がやりたいワークを手助けしてくれたためであったのです。そこでようやく、自分自身を「変えた」のではなく、周囲の人を通して神様に「変えられた」と理解できました。

2001年の開始以来、JELAは約20年に渡って毎年のようにアメリカの「グループ・ワークキャンプ」へ家屋修繕ボランティアを派遣してきました。新型コロナウイルス禍の影響もあって一時中断していましたが、今年、システム障害による往路便のキャンセルなどの困難を乗り越えて、無事に再開することが出来ました。7月19日～30日の期間で行われた今年のキャンプのテーマは「Influencer(インフルエンサー)」。

神さまを通してつながっている

木下 裕美子 (高校1年)



初めてワークをした日は、英語が通じるか、家主やチームの役に立てるかとても不安でした。ですが、チームのメンバーがたくさん褒めてくれたり、私に伝わりやすく話してくれたりしたので、不安はすぐになくなりました。でも、次の日に朝のプログラムでメンバーの話していることが分からず、少し涙が出てしまいました。その後ゆっくり話してほしいと頼むとゆっくり話してくれたので、理解しやすくなりました。私はみんながここまで私に優しくしてくれるのは、神様を通してつながっているからだと感じました。

沢山の愛は、神様の愛から

久保 李子 (高校1年)



キャンプを振り返ると、私は沢山の人の「愛」を感じ、触れることができました。羽田空港のホテルの方々、蒲田教会の方々や幼稚園の先生方、アメリカのキャンパーたち、同じCrew(班)の仲間たち、ホームステイ先のご夫婦、JELAのキャンパーやスタッフの人たち……沢山の人の愛があったからこそ、想定外のことがたくさんあったにもかかわらず、最高のキャンプとなりました。そしてこの沢山の愛は、神様の愛から始まって私たちにずっと繋がれているものかもしれないと実感できるようになった気がします。

神さまはそれぞれの心に

久保田 陽万 (中学2年)



行きの便のキャンセルで空港のスタッフやホテルの方々、また蒲田教会の方々に助けられたり、キャンプのワークでは、グループメンバーに実践とジェスチャー、また通訳を交えて教えてもらったり、ホームステイ先ではホストファミリーのおかげで楽しい時間を過ごせたり、色んな人が親切に接してくれました。僕はこのキャンプに参加するまでは「神様は、存在しない。頼れるものがない人たちのウソの存在だ」と思っていたのですが、このキャンプで出会った人やその行動を通して、神様は人それぞれの心にいるのだと気づきました。

素直に出せた気持ち

小林 育 (高校1年)



キャンプに参加して、アメリカと日本の文化の違いに戸惑う事が多くありましたが、行ってよかったと思えることがたくさんありました。その中の一つに、一緒に作業を行っていたグループの人たちとお別れのハグをした時、別れが悲しくて泣いてしまったことがあります。ハグをするまでは涙が出るほど悲しくはなかったのに、相手の感謝や別れが惜しいという気持ちが伝わってきて、思わず大泣きしてしまいました。普段気持ちが溢れて泣くことは無く、自分でも驚きましたが、自分の気持ちを素直に表に出せたことはとても良かったなと思います。

The Best Summer Ever

坂口 理久 (中学3年)



ワークでは、家主が僕たちの設置した新しいシャッターを見て、「I love it! I really love it!」と言ってくれました。誰かのためを思って働くとき、その人が幸せでいることが最高の報酬になるのだと感じました。これまでは色々な事を損得勘定で判断して、「人はみんな本音と建前だ。心から優しい人はいない」と思っていました。でもキャンプで出会った心の暖かい友達のおかげで、僕も「与える」人になりたいなと思うようになりました。そして、彼らは神様がいると信じているから人を幸せにしようとすると感じ、僕も神様がいると信じて生きる人生を選びたいと思いました。

学んだことは人の温かさ

伊藤 紗羅 (高校1年)



私がキャンプで学んだことは人の持つ温かさです。ワーク中は家のペンキを塗る作業をし、日に日に綺麗になっていく壁にやりがいを感じ嬉しくなりました。また、同じグループの人は私のカタコトな英語でも優しく聞いてくれて沢山会話をすることができ、他のアメリカの友達もいっぱい話しかけてくれて嬉しかったです。ある夜の集会で自分の罪を心の中で明かした場面では、過去のことを思い出して泣いてしまいましたが、沢山の人が抱擁してくれて慰めてくれました。人のために尽くし人に支えてもらえる幸せを実感しました。

神様はいるのだと実感

鶴田 航之亮 (中学3年)



このキャンプで初めての人とあまり話せないということを克服でき、日本と違う文化を見てきたことで世界の広さを実感することができました。また、このキャンプに参加する前も神様がいますと信じていましたが、本当に存在しているのか少し疑問に感じており、見守ってくれているけどあまり何もしない方だと思っていました。しかし、キャンプで神様がやったとしか思えないことがたくさん起きて、神様はいるのだと実感することが出来ました。ぜひまた来年も参加して神様と触れ合ったりたくさん話したりしたいです。

感謝の思い出

船城 壮志 (高校2年)



キャンプのボランティアワークで一番学んだことは、「感謝」です。私たちのグループが修繕した家の家主は足が不自由な年配の女性でしたが、修繕した後の家を見た時はゆっくりにこちらに向かって歩み寄り、抱きしめながらありがとう、ありがとうと涙をこぼしながら感謝を伝えてくれました。その時、とても報われた気分になり、感謝されるということがいかに原動力になるかということ、そして誰かに感謝するという行為の重要性を身にしみて感じました。

一生の宝物

宮菫 楓加 (中学2年)



キャンプに参加する前は、神様はあまり身近な存在ではありませんでした。でも、今回のキャンプを通して神様との距離が少しだけ縮まったと思います。私達がこうして出会えたことも、偶然ではなく神様の中でははじめから計画されていたことで、神様が私達を導いてくださったと思うようになりました。私達を出会わせてくださった、一生の宝物になるような体験をさせてくださった神様と、素敵な時間を一緒に過ごした仲間たち、家族、すべての人に感謝したいです。

アイスクリーム

本多 希望 (高校1年)



ワークの帰りにアイスクリーム店に寄ってリーダーがご馳走してくれました。いざ食べてみるととても甘く、シングルサイズが日本の5倍もありました。私が半分くらいで苦しそうにしているのを見て、リーダーが「これがアメリカンサイズでテキサスサイズはさらに倍ほどある。It's American joke!」と言いましたが、全く笑えませんでした。キャンプで新たな友人もでき、信仰を持つのに紆余曲折がある人が他にもいることが分かりました。また、巨大なアイスクリームを食べに行った話のように、参加前の想像とは全く異なる経験がたくさんできました。

素晴らしい出会いに感謝

力丸 巴渚 (中学2年)



私は英語が苦手です。それなのにグループの日本人は私だけで、話についていけず気持ちが暗くなることもありました。しかし、メンバーが様々な工夫をしてなんとか私と話そうとしてくれる様子を見て、自分からも何か話してみよう、これは神様から与えられたミッションなのだと思います。最終夜に「一生懸命頑張っている姿がカッコよかった」「作業が丁寧できれいだった」と言ってもらえて、たくさん辛い事、きついと感じる事もあったけど、そんな風に自分のことを見ていてくれたことに喜びと感謝を感じ、ミッションを成し遂げられた気がしました。

心の成長を感じたキャンプ

山口 凜子 (中学2年)



参加前の私は物事に対してマイナスな感情を持ちがちでしたが、ワークで失敗しても頑張った事を沢山褒めてもらったり、如何に失敗した事を挽回できるかに重きを置いて考えたりと、マイナスな感情をプラスに捉えられるようになりました。ディナーでは、神様は私たちのことを全て見ていて全て知っているということについて考え、神様の御心を知ることが大事だということを実感しました。今、何をしたら良いのか、何をしたら神様や自分の目の前にいる人に喜ばれるかを考えて行動していきたいです。

神様の愛と人との繋がりが

山下 倭来 (中学3年)



キャンプテーマの「influencer」に沿って、このキャンプを通してイエス様のことを誰にどんなふうに伝えていけるか、自分がどのように周りの人に影響を与える存在になるかにについて考えました。キャンプに行く前は、口先だけで神様を信じていましたが、毎日のプログラムを通して、本当に神様がいます! 苦しいこと、つらいこと、罪を犯してしまうこと、存在を疑ってしまうことがたくさんあるけど、神様は私の全てを知っていて、どんな時でも私を愛してくださるんだ!と感じました。自分の考え方や視点が変わり、少しだけかもしれないけれど新しくされたのかなと思いました。

参加者レポートの全文は
JELAニュースブログでご覧になれます



今回のアメリカ・ワークキャンプの実現のために、緊急宿泊先や再出発準備の場所を惜しみなく提供してくださった、日本福音ルーテル蒲田教会と蒲田ルーテル幼稚園に改めまして厚く御礼申し上げます。

支援者一覧 (2024年7月1日～10月31日)

青木孝士/浅野圭佑/阿部光成/伊久美麗子/石森寿幸・京子/磯貝高士/市吉伸行/遠藤邦子/大塚加奈/鐘ヶ江和馬/
 キョロ・サック/古庄理世/小宮俊作/坂口敬子/佐瀬萬亀/佐野友美/ジエムス・サック/篠崎智恵子/杉本洋一/杉山美紀子/園山道子/
 高良研一/辻裕子/寺澤陽子/徳弘浩隆/中川浩之/永島かな子/中村琢也/西垣親子/野口久志/芳賀美江/廣幸朝子/
 深川ひろみ/深澤理香/福嶋智恵子/福地明子/古屋四朗/保坂和子/堀江良彰/松岡俊一郎/光延和賀子/南節子/棟方玲子/
 村上貞子/森保宏/八木久美/八坂由貴子/山田英美子/ローレル・グリベック/hi-ba.高校生聖書伝道協会/グレイ合唱団/
 小城ルーテルこども園/唐津ルーテルこども園/恵比寿聖書フォーラム/聖書フォーラム委員会/日本ルーテル教団飯能ルーテル教会/JELC東教区女性会/
 JELC市ヶ谷教会/JELC唐津教会・唐津ルーテルこどもの教会/JELC玉名教会(以上順不同・敬称略)

ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせください。



来夏開催! アメリカ・ワークキャンプ2025 参加者募集!



- ◆派遣期間：2025年7月18日(金)～7月29日(火)
- ◆テーマ：「Equipped」
コリント信徒への手紙二 9章8節
- ◆内容：ペンシルベニア州で一週間のワークキャンプ
(家屋修繕、聖書の学び等を通して信仰的・
人間的成長を促す催し)に参加し、近隣州で
ホームステイもします。
- ◆年齢制限：2025年7月1日現在の年齢が14～20歳
であること。
- ◆参加費用：35万円
※友達を誘って参加する場合、本人・友人の
参加費から5,000円ずつ割引いたします!
JELAサポーター割もありますので詳しくは
お問い合わせください。
- ◆締切：2025年4月末日 必着

募集要項の詳細や応募方法は、ホームページ
 (www.jela.or.jp) にてご覧ください。
 皆さまの参加を心よりお待ちしております!

編集後記

JELAは、支援事業の対象者も内容も方法も非
 常に多岐に渡るため、「結局のところJELAは何を
 する団体なのか」と内省や哲学的思索がしやすい
 団体です。しかし、各担当職員の確かな手ごたえ
 を通して、ある共通点を見出せます。それは、JELA
 の小さな働きが、助けを必要とする方々にとって、
 現状打開のチャンスと希望になっているというこ
 とです。しかし、私たちはそれを誇ることができませ
 ん。なぜなら、それを可能に下さっているのが
 神であるという認識があるからです。また、人生に
 おける究極の現状打開策とチャンスは、人から与
 えうるものではなく、それも神から来るものである
 と信じています。この時期、多くの人々がクリスマスを
 祝いますが、これこそ、神からすべての人に分け隔
 てなく与えられた、死があるという現状への究極の
 打開策と永遠のいのちというチャンスであるイエ
 ス・キリストの生誕を祝うものです。このクリスマス
 プレゼントを支援事業を通して世にお届けできる
 ことは、毎日がクリスマスのようなJELAという団体
 の大きなモチベーションになっています。

この特別なクリスマスの季節、一人でも多くの方
 が平安に過ごせますように。(渡辺薫)

JELAの公益事業を継続的に支える JELAサポーターを求めています!

年1,000円から!
 クレジットカードの自動定額決済がご利用いただけます。



詳しくは JELAサポーター で検索



JELAはSDGs(持続
 可能な開発目標)の
 達成のために取り
 組んでいます。

寄付控除の対象となります!

JELAへの寄付金は、公益法人への寄付として、税
 制優遇の対象となります。

【優遇を受けられる税の種類】

- ・ 所得税(所得控除)
- ・ 個人住民税(自治体の制度によります)

また、法人による寄付についても、通常よりも大きい
 損金算入限度額が認められます。

寄付控除に関する詳細は、JELAのウェブサイトをご
 参照ください。

JELA 寄付控除



〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
 TEL 03-3447-1521 FAX 03-3447-1523
 ① www.jela.or.jp ② jela@jela.or.jp

寄付金のご送金先: (旧法人名の払込取扱票もご使用可能です)
 ゆうちょ銀行 口座番号: 00140-0-669206(加入者名: 公益財団法人JELA)
 三井住友銀行 飯田橋支店 普通2896506(口座名義: 財団法人JELA)